

なぜ悲しい曲を聴くのか

源河 亨 (Tohru Genka)

日本学術振興会／東京大学

悲しみに浸りたいので悲しい曲を聴く、悲しい音楽を聴いて悲しくなった、といったことがよく言われる。だが一方で、悲しみはネガティブな情動であり、可能なら避けたいものであるはずだ。では、なぜ人はわざわざ悲しい曲を聴くのだろうか。

これに対する回答の候補はいくつかあるが、本発表の目的は次の見解を擁護することである。それは、悲しい曲を聴いて生じるのは悲しみではなく、音楽の美しさに対する感動といったポジティブな情動のみであり、だからこそ人は悲しい曲を聴くのだ、というものである（たとえば、Kivy 1989, Zangwill 2015）。

こうした見解の根拠としては主に次の二つがある。第一に、曲を聴くのを止めず鑑賞し続けるという行為は、そのときポジティブな情動が生じていることを示している。第二に、鑑賞に際して悲しむべき物事がない（何の喪失もない）ので、そのときネガティブな情動が生じていると考える理由はない。むしろこうした見解によると、「音楽を聴いて悲しくなった」と言われる場面とは、「悲しい」という情動用語で記述される美的性質（表出的性質 expressive property）が音楽の特徴として聴かれている場面にすぎない。そして、表出的性質としての「悲しみ」は、聴者に情動としての悲しみを喚起するわけではない。

だが、悲しい曲が悲しみを喚起しないという主張は、音楽聴取についての素朴な直観に反しており、非常に多くの反論を呼んでいる。そうした反論は主に、「悲しい曲を聴いて悲しくなった」という聴者の内観報告と、そのとき悲しみが生じたことを示唆する生理的反応がみられたという実験の二つに基づいている（たとえば、Robinson 2004, Young 2014）。

これに対し本発表は、どちらの論点も反論としては不十分だと主張したい。まず内観報告については、背景的な信念の影響で内観が不正確になる場合があることを指摘し、そうした影響のために聴者が誤った内観報告をしている可能性があることを主張する。次に、音楽聴取時の生理的反応は、情動としての悲しみが生じていることを決定づけるものではなく、むしろポジティブな情動が生じていることを示唆しているとも解釈できると主張する。

Kivy, P. (1989) *Sound Sentiment*, Temple University Press.

Robinson, J. (2005) *Deeper than Reason*, Clarendon Press.

Young, J. O. (2014) *Critique of Pure Music*, Oxford University Press.

Zangwill, N. (2015) *Music and Aesthetic Reality*, Routledge.